

「絵本と演劇で紛争を止める」と言うための学びの後ろ

平丸久美子

ひらまる くみこ
一般社団法人ピースセルプロジェクト代表理事
また劇作家(篠原久美子)として戯曲を発表する傍ら
小学校での演劇教育や中高生・一般向けの
「劇作ワークショップ」に携わってきた
主な作品に『マクベスの妻と呼ばれた女』
『ケブラー・あこがれの星海航路』『空の村号』などがある

一 日本での演劇教育の実践から

イラクでの活動をお話する前に、日本での演劇教育実践について紹介します。そこで私がやってきたことは、子どもたちと一緒に脚本を作って上演する、劇作ワークショップをする、主にこの二つです。公立小学校で演劇の授業を八年間させていただき、その他に、市民ミュージカルや、中学、高校、大学での実践的な劇作ワーク

ショップなども行ない、楽しみながら学んでいけるプログラムを作っていました。

例えば、宇都宮市教育委員会の依頼で始めた「人権ワークショップ」があります。人権問題を題材とした短い脚本を作ってエチュードをするというワークで、百人程の高校生が参加してくれました。このプログラムにはヘッドラインニュースという手法を使いました。ヘッドラインとは新聞の見出しです。事前にこちらで、事実に基づいた、若干創作の入った記事を短く書いて用意して

おきます。ジェンダーや障害者、外国人等の人権問題を扱ったヘッドラインを作り、くじ引きでグループごとにどの問題をやるかを決め、お話を作ってもらいます。その時にティビカルストーリーという、この通りに書いていくと、起承転結のあるお話ができるといふ雛形を用いました。あるところに誰々がいて毎日何々をしていました。ある日、何かがありました。そして何とか、ところが何とか、最後に何とか……という雛形をもとに、グループで順番に回したりして、短時間でいくつものお話を作ります。

その時に一つだけ条件をつけます。もらった題材とは全く違う人を主人公にして始めるといふことです。「あるところに誰々がいました」というところを「あるところに障害を持ったお子さんのお母さんがいました」とはしない。全く関係ないところから始めて、もらった題材の人物とどこかで出会う話を作ってもらう。実は始める前に、学校の先生たちからこう言われたんです。人権問題を扱うとき、生徒たちとディスカッションすると、正面から向き合えずぎてしまって、ウゲーって言われてしまふことがあった、と。それが、全く関係のないところから始めると、たとえば、こんなお話ができる。「ある

ところにおしゃれにしか興味のない女子高生がいました。毎日、メイクとファッションのことばかり考えていました。ある日、友達と買い物に行きました。大好きなブランドのお洋服を選んでみると、中からデザイナーの人が出てきて、新作を紹介してくれました。ところがその人は知的な障害を持った人でした。今まで障害者というのはおしゃれじゃないと思っていただけ、超おしゃれな服を作っているその人と、ファッションの話で盛り上がって友達になっていく……という話ができて、それを基に作るエチュードもすごく楽しそうにやってくれます。ですね。彼らにとつて「遠い」と思っていた人権問題が自分事になるっていう面白さがあったようです。

なかでも、最も学びが大きかったのは、公立小学校での演劇授業です。授業を行なったのは六年生だったんですけど、担任の国語の先生から、「私たちは学校で演劇教育をしたら、子どもたちの表現力が伸びるものだと思っていました。実際に伸びたのは、人の話を聞く力と友達を尊敬する力でした」と言われたんです。それから数年後、この学校に転勤して来られた先生からはこう言われました。「この学校に転勤したかったんです。アンケートで『自分が好き』だと答える子どもの割合が近